



Title	カフェ・オ・レ精神
Author(s)	阪本, 恭子
Citation	臨床哲学ニューズレター. 1998, 2, p. 81-82
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/81745
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

[V 海外事情（２）：哲学カフェの行方]

カフェ・オ・レ精神

要約紹介：阪本恭子

朝日とバスチーユ広場の喧噪、そしてコーヒーの香りあふれるカフェ・デ・ファールに集う200を超える人々。日曜ごとにくりかえされる風景だ。しかし今日はいつもと違って、はりつめた雰囲気だ。ここからフランス全土に広がった「哲学カフェ」の張本人マルク・ソーテが二日前、『ル・モンド』紙に厳しく非難されたからだ。それによると彼は、ヒトラーの本当の目的は労働運動の根絶でユダヤ人殺害ではないこと、アウシュヴィッツのガス室の件も疑ってかかることができると、ある私的な通信で口にしたという。11時。ソーテ現る。細身にジーンズとシャツ。50代には見えない。淡い青色の目は温かくも厳しい。議論の必要はない。『ル・モンド』の「偽造された描写」には「読者の手紙」で応える。アウシュヴィッツ否定者と一緒くたにされるつもりはない。これだけ説明すると彼は代理人にマイクを渡して立ち去った。「意気地なし」とつぶやく一人の女性を除いて抗議する者はいない。それどころか拍手喝采。彼のファンは多い。

ソーテ。ニーチェ研究家でパリ政治学院の非常勤講師。著書『ソクラテスのカフェ』の中で彼はこう記す。気の合った仲間たちと毎週日曜「仕事の話をするため」カフェ・デ・ファールに集まっていた。1992年のことである。この「哲学相談所」の様子をラジオで聴いた人々が議論に参加したいと押し寄せて来た。哲学カフェはそうして始まったのだと。無料で定例集会の場所と討論の司会を引き受けるカフェは、パリだけでも20を数え、その波は地方、スイス、そして東京へ。独自の雑誌『フィロ』まで抱えるこの哲学カフェを、ソーテは古代アテネのアゴラにたとえる。そして「われわれは哲学の革新を体験している。それは哲学の始まりにも匹敵する。なぜなら哲学が再び対話の中で行われるからだ。」と言う。「哲学におけるパラダイムの変換」というわけだ。

ともに語り、互いに耳を傾けあうこと。ますます不合理になりつつあるこの世界から、理性が全くなかったわけではないという希望。行き先を見失ってしまったという感情。それらがこれほど多くの人を哲学へと駆り立てる。したがってカフェで興じられるのは、形而上学や論理学ではなくモラルである。誰もが一家言をもち、

評価を人々にゆだねる。そこで求められるのは問いへの答えではない。考える主体として共に自己を見いだすこと、つまり哲学を共に体験することである。デカルトのコギトが信奉されてきたフランスで、哲学の新しい形が発見されたのか。「『われ』から『われわれ』へ、『われ思う』から『ゆえにわれわれあり』への移行に直面している」とソーテは言うが、大衆の自己欺瞞と、権力に飢えた輩の誘惑の危険を指摘する声もある。彼の「ガス室発言」と、それをカフェで論じること示した不安は、この指摘が決定的外れではないことの現れであろう。

ソクラテスからニーチェ、またトロツキー、スターリン、ヒトラーなど、自著でソーテは西洋哲学や寄せ集めた歴史について実に冒険的に語る。「ガス室発言」が失言とは思えないほどに。そして西側の「商人社会」を診断する。現況をソクラテス時代の反復とみなし、ひいては市民戦争の到来を予告する。自分自身がソクラテスの再来であり、哲学カフェはポリスが理性を取り戻しうる唯一の場所であることをほのめかしながら。はたしてソーテは教育的エロスを通じて人々を自己認識に導く発問者なのか、それともただの予言者か。冒頭の彼の釈明演説のあとカフェの活動から離反した女性哲学教師は説明する。聴衆はたいがい不安定なアウトサイダーで、問題を抱えてやって来てはすぐ影響される。哲学カフェは政治的悪用から身を守ることができないと。彼に反発するのは彼女一人ではない。それでもカフェを去りはしない。哲学カフェに脈打つのは民主的で批判的な精神のはずである。ならば自ら問うべきだ。ある機関が創設者から自立しなければならない段階はどこかと。哲学が偶然に陥ることなくアカデミズムの束縛から放たれうるか、それは疑わしい。

*本文は以下の二つの記事を再構成したものである。

Im Geiste des Café au lait (Frankfurter Rundschau 1996/7)

Der kategorische Aperitif (Frankfurter Allgemeine 1996/7)